

## 監督回顧録

## 九年間の「カイザー関大」

佐々木 敏



これはひとりの「監督」の自慢の記録では決してない。私の監督在任中の9年間（昭和34年度～42年度迄）に、活躍した現役諸兄の栄光の真実の足跡である。まさに「カイザー関大」の記録といえよう。昭和34年（1959）の春、私は、監督に就任することになった。前任者の松井先輩が勇退されてのことである。「30周年記念誌」には、こう書いておいた。

……（監督就任）以来昭和42年度までの9年間、数々の栄光の足跡を残した現役諸君とともに「カイザー関大」と叫びつつ、OB諸氏のご支援のもとに、歴史のひとこまひとこまを歩んでまいりました。思い返せば、在任中は、「第2期黄金時代（昭和35年より37年の、木田・現堀江、市口、伴各主将の時代の5連覇）」と、それに昭和39年の故村山主将以後の12連覇の金字塔をうちたてた時代の大半（昭和42年の8連覇まで）の西日本での「ゆるぎない王座の時代」と、リーグ戦におきましては、順風満帆でありました。一方、個人戦では、市口政光君の東京オリンピックでの金メダルの獲得を頂点とした数々の栄光、それに国内外に栄光の足跡を残した多数の名選手が輩出いたしました。まさに「カイザー関大光あり」「カイザー関大有力あり」の

時代で、「嵐劈く鳳」のごとく躍進を続けたのであります。これらは、創部以来の、諸先輩の情熱と研鑽がここに開花したのであります。30周年を記念しての部史に、私が在任中のあゆみを綴ることは大変な誇りであります。そしてそのことを皆様に感謝申し上げます。また西脇義隆コーチをはじめ、指導陣に加わっていただいた諸兄のご尽力があってこそ、この大任を無事に果たすことができました。併せて感謝申し上げます。回顧しながら、資料を参考に綴って行く前に、故人となられた関係者諸氏のご冥福をお祈りいたします。

あれから、20年経った。そしていま50周年目を迎えて、その記念史に、改めて「監督回顧録」を書いている。時が経っても、やはり、鮮明に脳裏に刻まれている思いは同じだ。私にとってあの9年間は、関係者のすべてに、「感謝」の日々だった。私にとってあの9年間は、当時の現役諸君を、「称賛」すべき日々だった。改めて、関係者の栄光を称賛し、ともに歩いた足跡に感謝しておきたい。その「カイザー関大」の日々に満腔の謝意を捧げておきたい。

## 1. 昭和34年：淡路合宿

春、淡路島の洲本で合宿を行った。前年度からの劣勢を挽回するためにである。砂浜での「ダッシュ」。三熊山の山頂までの「うさぎ跳び」。主将の住本、副将の山本、主務の三好（現・樋口）岸

上、金谷の4回生を先頭にみんながんばった。毎日新聞の予想が「……（関大は）重量級できめる関学とちがい各級でまんべんなく得点をあげなければならない」と書いている。つまりは、ポイントゲッターが手薄であるということなのだが、春の合宿で、木田（現・堀江）などの3回生と、市口などの2回生が地力を蓄えて一段と成長してくれたものの、リーグ戦の結果は、春秋ともに関学の後塵を拝して2位だった。

だがこの「春合宿」が功を奏して、関大の地力は、大いに増強したのである。

## 2. 昭和35年：ローマ近し

この年の3回生は大勢いる。その3回生が実力をめきめきつけてくれた。木田（現・堀江）主将、中川副将、矢路主務、梶原（現・白井）、瀬脇、竹田の4回生も充実している。そして春には久しぶりに、関大史上11回目の、優勝を飾ってくれた。監督としての私の「初勝利」であった。そして秋にも連覇。これで「第2期黄金時代」が始まった。

さらに、3回生の市口が、快挙をなし遂げられている。この年はローマ五輪の年だった。その出場権を獲得して、しかも初陣の海外遠征で、堂々7位に入賞したのである。昭和39年に、アジアではじめての、東京オリンピック大会が日本で開催されることになっていた矢先である。日本は地元開催の名誉のために強化対策に全力を傾注していた。そしてそのオリンピック強化合宿に、関大から、前松井監督の力添えで、若手がどんどん参加して実力をつけていったのである。そのなかで、とびきりに頭角を現したのが市口選手だった。

私の手元に1枚の「電報」がいまも残っている。「……ローマ・チカシ……」と、ある。ローマ五輪の最終予選会に、介添え役で同道した、2回生の伴義孝が打電したものだ。市口は、実力伯仲で大激戦のグレコローマン・バンタム級で、見事に優勝してしまったのである。この場合、「し

てしまった」と書くほうが適切であろう。大方の予想を大きく上回る成果だった。あとは日本協会の理事会での最終決定を待つのみである。だからこの時点では電文の「チカシ」が最も適切な表現であったろう。

東京勢の学閥を背景とする「徒党」は、ときに横暴ですらある。関大関係者からは、このとき、初代監督の村田恒太郎氏と松井前監督が、日本レスリング協会の理事に名を連ねていた。市口選手の代表決定には、両者の発言が与かったに違いない。これも感謝しておくべき事実の一片ではある。



写真▷「千里祭体育行進」・昭和36年度

## 3. 昭和36年：グレコの関大

昨年の市口選手のグレコでの五輪出場が「グレコの関大」を世間に印象づける年になった。評価は、その土壌のないところに、芽生えない。関大勢の若手はこの頃から果敢にグレコに挑戦することとなった。その結果、グレコの関大の異名は、単に西日本にだけではなく、東京に、すなわち日本に鳴り響く結果となったのである。そのあたりの事情は「通史」に詳しく紹介されているはずなので、参照していただきたい。

この年も快進撃である。市口主将、福家副将、

松田主務、荒武、神谷、桂、岸田、高田、松浪、森、吉村、中野の4回生が鉄壁の布陣を張っていたからだ。それに続く若手も実をつけている。恐らく相対的なチーム力としては、この昭和36年度が、関西大学レスリング部史上で随一ではなかったかと思われる。春季リーグ戦優勝。3連覇、関大通算13回目の栄光だった。続く秋季リーグ戦も優勝。4連覇、14回目の栄光である。

#### 4. 昭和37年：考える力

東京五輪を2年後に控えて、日本レスリングの強化策が、この頃から多方面に展開されることとなった。この頃、日本レスリングを率いる総帥八田一朗会長のユニークな指導が世間の話題になりつつあった。真冬の房総半島の海で、真っ裸の大勢の屈強な若者が、寒中水泳をしている。驚きと批判を含めての報道が紙面を賑わしたことがある。東京五輪対策のレスリング強化合宿の日常風景であった。ときには、真夏の太陽がカンカンに照っている上野動物園での、風景が報道される。見出しには大きく、ライオンとにらめっこ、とその奇抜な練習法が紹介されることもあった。檻の前に立つレスリング選手が、ライオンとにらめっこをして、ライオンをたじろかせたら、選手の勝ちだ、こうして集中力を養う、と八田会長のコメントがついていたりした。うだるように暑い。ライオンは日陰に引っ込んでしまって昼寝を決め込んでいる。とても人間様を相手にするような様子はない。そんな状況で、炎天下のそのにらめっこは、1時間ばかりも続く。にらめっこが本質ではないのだ。目的は、禅的手法の訓練がそのひとつ。もうひとつは、マスコミを意識した戦略であった。いずれにしても、こうした八田式トレーニング方法は、単に選手だけにでなく、多くの関係者や世間に、「考える力」を与えてくれたものである。

関大のレスラーたちも、一連の東京五輪強化合宿にどしどし参加したのである。そして遅く、

図太くも、また緻密な見通しをもつようにも、鍛えられたのであった。

この年、4回生は伴主将、光富副将、西本主務の3名だった。大量のポイントゲッターを卒業させてしまった関大は布陣をひくのに苦しかった。それでも春季リーグ戦は勝った。5連覇である。この通算15回目の優勝が、「第2期黄金時代」の節目ではあった。だが秋季リーグ戦は、残念にも、コマ不足で後塵を拝することになった。

ところで、この年、OBとなったばかりの市口政光選手が大活躍をする。1962年度世界選手権大会と1962年アジア大会で、優勝したのである。詳細については本書のいたるところで語られるはずだから、省くことにする。関大が、燃え上がったことは間違いない。「市口に続け」と。ただひとつ、この吉報が「第2期黄金時代」の最大特徴のひとつであることを特筆しておかねばならない。

#### 5. 昭和38年：「45日間」

この年の春秋は、リーグ戦において、勝てなかった。いわば小休止であった。だが石井主将、山本副将、井宮主務、中川、遠藤、小沢、脇田の4回生を中心とする関大チームは、前年の秋の敗退と合わせて、この年の敗退の期間に、大いなる充電を行っていた。リーグ戦では、陣容を組み立てるコマ不足のために、後塵を拝してしまったものの、個人戦では大躍進だった。「市口に続け」の標語が実質となりだしたのである。その実質のいかほどかも「通史」に詳しいはずである。

ところでこの前年度からの充電期に、翌年から始まる金字塔「第3期黄金時代」の下地が、着々と根づいていたのである。印象に残ることがある。「30周年記念誌」の「この年の思い出・37」欄に、光富副将が綴っている「45日間の長期合宿」のことである。合宿そのものの様子にここでは触れない。これも本書に記録されているはずだからだ。この合宿生活で学んだことはさまざまだろう。

だが、現在の大学生や、日本の若者の姿を見ていれば、どうしてあの当時の学生には、こうも、自律の精神が漲っていたのか不思議でさえある。この長期合宿計画は、学生が、自ら立案したものである。理由は、「リーグ戦5連覇」のあとの、極端なチーム力の低下を克服することにあった。それにしても、「45日間」という長期の合宿をよくも運営したことだと感心させられる。その動因形成の真実は、ただ一つ、関大レスリングの伝統と、「5連覇」の意味であろう。「伝統」を考えてみる。「意味」を考えてみる。そして、自己の、とるべき道を探し出す。これが大学スポーツの真髄ではないか。関西大学のレスリングには、この「真髄」が、伝統的に育ってきた。ここでいう「伝統」を扁平に捉えないでほしい。実は「伝統」という言葉にも、真髄がある。やすっばいお題目だけの伝統などは何の役にもたない。伝統とは、守ることでなくて、そのときどきの担い手が、新たに作っていくものではある。だとしたら、「45日間合宿」の真髄は何だったのか。それは新たな伝統となりえたのか。その答えは、当事者たちに、対話を求めて尋ねてみてほしい。時代を超越して納得のいく手応えが返ってくるはずだ。

## 6. 昭和39年：金メダルの余波

東京オリンピック大会の年である。昭和37年卒業の市口政光君が「金メダル」をとってくれた。その経緯については、本書でも、多くが語られるはずであるので事実のみを書いておく。読者が、この「金メダル」のもつすべての意味を、増幅させてほしいからでもある。この栄光の年、関大の「第3期黄金時代」が始まることになる。私が記録しておいたそのさわりを、「30周年記念誌」から、直接引用しておきたい。

果せるかな春季リーグ戦は5戦全勝で4シーズンぶりに優勝し、村山主将、藤井副将、丹羽主

務、西尾副務、岸本、鶴谷、平田ら4回生を中心に秋に向けて再度連覇を目指して猛練習を行いました。秋には「粒揃いの関大」と評されて、「まず今春優勝して同大から王座を奪い返し16回目の優勝を遂げた関大は計量級に、村山、山本、重量級に中野、藤田と各クラスに粒揃いの選手をそろえ、バランスのとれたチーム力では相変わらずリーグ随一だ」の評判どおり6戦全勝して連続優勝を遂げたのであります。以後6年計12シーズン連続優勝という未曾有の快挙をなしとげる第一歩を踏み出したのであります。すなわち39年の故村山主将（昭和51年に夭折）、40年の早淵主将、41年の中野主将、42年の岡田主将、43年の倉橋主将、44年の北川主将の6カ年の長きにわたって、連続優勝という、無敵の金字塔をうちたてたのであります。この時期が真の黄金時代ではないかと思えます。

一口に「6年間」「12連勝」と謂ってしまえば、あまりにも軽く聞こえてしまう。生身の身体。時代精神。学生気質の変容。さまざまな条件が介在しての6年間・12連勝である。そこに何があったことだったかは、本書の全貌が明らかにしてくれることだろう。さらには、手柄話めいた明るい材料ばかりではなく、日の当たらない暗い真実もあるはずだ。それは当事者をさそいだして、一献をかたむけながら、訊きだせばよい。そこには、人生の教訓にも値する、掘り出し物の「何か」がきらめいて覗けることだろう。

## 7. 昭和40年：目標は連勝

「目標は連勝を続けることにある」と、「30周年記念誌」には、昭和40年度の私の報告を、その冒頭に書きだしておいた。この年、大方の見方は、「関大苦しい布陣」と、厳しい予想をたてていた。そのひとつ学連の後援新聞社紙『毎日新聞』は、次のように、見ている。

……今春3シーズン連続、18回目の優勝を果たした関大も、秋は苦しい布陣となりそう。フェザー級の佐藤を負傷で欠き、ひざの悪い早淵を起用するなど苦しい布陣。

それでも秋にも勝ってくれた。翌春の「学連プログラム・記者の目」が、その苦しい状況ぶりを、的確に表現している。

……さて、昨秋のリーグ戦は、またも関大が、関学、同大両校必死の挑戦をはねのけて、4シーズン連続、19回目の優勝を遂げた。……ところが（負傷出場の）早淵は闘志をふりしぼって立派に役目を果たし、関大を優勝に導いた。この気力こそ、すべての選手が見習うべきで、八田賞（最優秀選手賞）の栄誉も当然だろう。

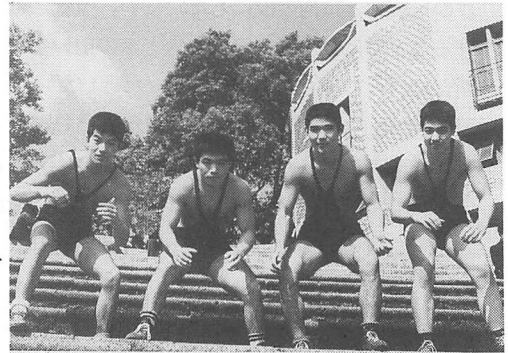
早淵は、慢性の膝の故障をおしての出場であった、対抗別戦績は芳しくなかった。関大の主将は、通常、自ら全勝しながらチームを引っ張っていく。それも印象に残る勝ちっぷりを示して、他校チームに、威圧感を与えての勝利が常である。全勝を飾りえなかった早淵が、なぜに、最優秀選手なのか。関大の優勝を決める大事な一戦に、「記者の目」子が見抜いた、すべての選手が見習うべき、「闘志」を見せたからである。この「闘志」が、カイザー関大の、伝統ではある。その伝統を、見事に、早淵主将、西山副将、今村主務、近藤、松田（現・田辺）、丹司、中井ら4回生が中心になって、守ってくれた年度だった。やはり、伝統とは、創るものに相違ない。

## 8. 昭和41年：苦しかった関学戦

松井さんのご推挙をいただいて、私が「アルゼンチン建国50周年記念国際レスリング大会」に監督として日本代表選手団を率いることになった。3月18日にその遠征の途についたのだが、チー

ムには関大の藤田裕充も選ばれていた。この遠征は次回のメキシコ五輪に向けての強化合宿の一環だった。藤田君はこの大会でライト・ヘビー級に出場して優勝し、関大の、心意気を示してくれた。

こうした幸先よいスタートとともに、春のリーグ戦では、「首位不動の関大は相変わらず層の厚さを誇り」との予想どおりに、「苦しかった関関戦」を含めて、8戦全勝を果たして「5連覇」「通算20回目」の優勝を遂げることができた。秋には9大学に膨れ上がった。これも見事に乗り切って、引き続き、6シーズン連続、通算21回目の優勝を飾ることができた。すべての原動力は、中野主将、佐藤副将、住谷主務、井加田、加藤、山本の4回生であった。



写真▷連覇を続ける関大健児・昭和41年頃

## 9. 昭和42年：ありがとう

特に印象に残る年となった。この年、私は、本務上の都合で、監督を退くことになっていたからである。この年の1月に新ルール「3分×3ラウンド制」が採用されることになった。しかし関大の対応は早かった。それには幾つもの要因が上げられる。

① 松井前監督が、日本レスリング協会の審判

委員会業務担当の理事を務めていた関係で、ルール変更の一部始終が早くから分かっていた。

- ② この頃の関大は、毎年のように、海外での各種大会に、日本代表選手を送りだしていたので、情報源には事欠かなかった。
- ③ さらに関大は日本協会が主催する各種強化合宿に多数の選手を参加させてきたので、ここでも、逸早くさまざまな情報を察知することができ、かつ対応策への適応力を参加選手一人ひとりが的確に把握しつつ、そのノウハウのすべてを関大に還元してくれた。

この年の4回生は、岡田主将、大津副将、渡辺主務、石井、藤田の5名だった。予想では、関大の「優勝は危ない」と、あった。その最大原因は、この1、2年、「穴を埋める新人」に恵まれないという状況が続いたからではある。だが部員たちは頑張ってくれた。否めなかったチーム力の低下があったものの、春を、7勝1敗で乗り切って、同率の関学に、総得点差で、わずかに「1点」だけ上回って連覇をつなぎとめることができた。関大の挙げた総勝ち数は「66」である。その1勝1勝のすべてが、この「7シーズン連続優勝」を、創造してくれたのである。「1勝」の重み、「一人」の重み、がこんなに身に沁みたことはない。これも学生スポーツの真髄であろうか。

秋も苦戦であった。「軽量級にいま一つ不安がある」関大の前評判だったが、こんどは全勝で、「8シーズン連続の偉業」を樹立してくれた。努力するところに、道は必ず拓ける。自ら道を拓くところには、必ず強運がついてくる。「30周年記念誌」には、その経緯に触れながら、次のように書いておいた。

このリーグ戦より、従来の11人制が9人制（F1名、B2名、Fe2名、L2名、W1名、M1名）に変更となったことが幸いしたのか、……

偉業を打ち立てたのであります。

このころ何処の大学でも体育会に入部する部員が減少しつつある傾向にあった。また戦後の食生活の見違えるような好転で、日本人の体位が急激に大きくなって、特に軽量級（52キロ級）の人材不足が目立ちはじめていた。そうした理由での連盟の裁断が、「9階級制」の、採用となったのである。その軽量級に不備のあった関大には幸運であった。だがしかし、努力のないところには、欣求の志のないところには、こうした「事象」は何の意味としても働くことはないだろう。「運を呼び込む」この秋のリーグ戦体験もまた、学生スポーツの、真髄ではある。直接マットの上での当事者ではない「私」にさえ、その真髄が見えてきて、その後の人生において役立ったことはいうまでもない。この年に限らず、自らの意志と努力の結果、あらゆる「真髄」に遭遇することのできた、我が関大の親愛なるレスラーたちは、間もなく新しい世紀を迎えようとしている。彼らは、1997年のこの現在、真髄をくみだした要因が何であったのか、を自覚してくれているはずだ。その自覚するところを、広く社会に還元していただきたい。そこにこそ学生スポーツの究極の真髄があるのだ。



有り難う。ありがとう。この9年間の「カイザー関大」体験は、私に、さまざまな真髄を見せてくれた。本当に有り難う。9年間での邂逅を思い出しつつ、関大における「青春のパライストラ」でお付き合いをいただいたすべての部員諸兄の氏名は、本書の随所と輻輳することにもなるが、最大の敬意を込めながら、書き記したつもりである。万が一記述もれがあったならば、許していただきたい。4年間のクラブ活動生活を終わって「OB会名簿」にその氏名が記載される仲間のみが、関大レスリング部の「50年」を支えてきたのではない。この哲理は万事に共通することではある。改めて、理由はともあれ、関大レスリングに入門し

たものの、挫折せざるえなかった諸氏もまた大いに今日の関大を創造してくれたのである。彼らにもまた感謝しておきたい。そして何処からであってもいいから、レスリングを、関大レスリング部を、応援していただきたい。(昭和32年卒)

関西大学レスリング部監督  
大阪府レスリング協会理事長

大阪府レスリング協会副会長  
関西大学レスリング部OB会副会長  
関西大学体育OB会常任理事  
西日本学生レスリング連盟常任理事  
日本レスリング協会理事  
日本レスリング協会A級審判員  
(歴任)

(完)

東京五輪金メダリストの市口さんが「報告」のために母校訪問(昭和39年度千里祭)。右から2人目が監督の佐々木さん。監督の胸中はこううえなく晴れやか…。



写真▷佐々木監督当時の「関大・慶応」定期戦(昭和35年)